

第 49 回語学ゼミナール・オンライン 2021 に参加して (H. Ikeda) [J]

2021 年 8 月 31 日から 4 日間、語学ゼミナール・オンライン 2021 が開催されました。今年の語学ゼミナールも去年に続き新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインでの開催となりました。今年は招待教授としてお迎えした Josef Bayer 教授（コンスタンツ大学）による基調講演のほか、台湾の文藻外語大学から参加してくださった Shoou-Huey Chang 教授による研究発表等、さまざまな研究発表があり充実した 4 日間となりました。以下、今年のゼミナールの様子について紹介いたします。

初日、Bayer 教授は „Deutsche Partikeln als funktionale Köpfe“ という題目で基調講演をしてくださいました。Bayer 教授は、そもそも不変化詞とは何か、不変化詞の使用制限、なぜ不変化詞が統語論においても注目されるようになったのかなど、基本的なところから解説していただいたので、難しいところもありましたが、大変興味深く拝聴することができました。また、Bayer 教授は心態詞によって要求する法が異なるのはなぜかという問いに対して、探査子である発話力標識 (Force) と目標子の心態詞の間的一致関係によるという答えを提案されていました。ちょうど生成文法に取り組んでいた私にとって、ドイツ語の統語論の問題が生成文法の枠組みを使って説明されるということを実際に勉強する大変貴重な機会となりました。

また、Chang 教授は „Akkulturation der Sprache: zum Sprachwandel der Juden in Deutschland“ という題目で研究発表をしてくださいました。ユダヤ人が言語面においてドイツにどのように順応していったのかということやアイディッシュ語等の解説も含めて説明をしてくださいました。私にはアイディッシュ語をどこかで聞いたことがある程度の知識しかありませんでしたが、それでも大変楽しく拝聴することができました。

そのほかにも、2 日目には Gabriela Schmidt 教授が „Mehrwortverbindung und Wortbildung: Eine strukturelle Betrachtung“ という題目で研究発表をしてくださいました。慣用語法 (Phraseologismen) の定義や、何を話者のメンタル・レキシコンとみなすかといった議論は、複合語に特に興味を持つ私にとって、複合語含めさまざまな言語表現について考えることができ大変興味深いものでした。

ここでは紹介をつくすことができませんが、ほかにも様々な先生方や博士課程の先輩方が興味深い研究発表をしてくださいました。

私にとってドイツ語で行われるゼミナールに参加するということは初めてのことで、正直ドイツ語の理解だけで精一杯で内容がわからないこともありました。それでも 4 日間を通して、自分の今後の勉強・研究にもつながる大変貴重な経験をさせていただくことができました。

最後になりますが、実行委員の皆様にはこのような貴重な機会を設けていただき大変感謝しています。また、Bayer 教授はじめ、興味深い研究発表をしてくださった先生・先輩方にもこの場を借りて御礼申し上げます。4 日間ありがとうございました。

池田 裕行（東京外国語大学大学院博士前期課程）

0183

作成日 : 2021/10/22